

発掘三篇 その他

「群衆」「孤独の日に於ても」「従弟」

寺島珠雄

一九六八年十一月に現代思潮社が刊行した『秋山清詩集』は、その当時として秋山の「全詩集」のごとくだった。秋山自身、そこを承知して、いわゆるあと書きに当たる文章「巻末に（一九六八年十月十日）」のなかで次のように述べている。

——しかし、現在までのほとんどの作品を集めながら「全詩集」としなかったのは、自分がまだ干上ってしまっていたはたまらぬ、これからだ、という思い上がりかもしれない期待を、失いたくなかったまでのことである。

右の秋山の思いは、同じ詩集の増補版の五年後の刊行につづいて、一九七七年『恋愛詩集』（冬樹社）、七八年『季節の雑話』（創樹社）があることで現実化し、さらには一九八四年には八十歳を記念する『自選詩集』（秋山清・八十の念）も加わっている。つまり秋山の詩作の

過程は『秋山清詩集』と、その増補版をふくむ後年の四冊によって全体的にたどり得る、ということになる。

そこを認めた上で、現代思潮社の『秋山清詩集』が編まれる時、洩らしたか外したかされたまま増補版にもあられずじまいになっている作品を私は報告しておきたい。とりあえず三篇である。

まず一九二七年九月発行の『バリケード』創刊号のもの。この雑誌は「詩壇の公器」をうたうと同時に「其の最大使命とする處はプロレタリア詩人の全詩文壇的進出展開への第一機関たるにありその一貫する大動脈はアナキスチックな詩的精神である」とも称し、発行は社会評論社、編輯兼発行者磯貝錦一、創刊号の本文は三十五ページで定価二十銭、現在で言う取次店の「大売捌所」四社を通じて市販された。また「バリケード」責任編輯者（イロハ順）には次の八人が並んでいる。

萩原恭次郎 岡本潤 小野十三郎 河本正男 高橋勝之 津田出之 中島信 草野心平

このうち「編輯手記」に署名している河本、それに津田が実務を担当したそうで、三号までを私はコピーで読める。コピーした原本はほかならぬ秋山に借りたのだ。さて「全プロレタリア詩人作品號」と斜めに表紙へ打ち出した「バリケード」創刊号の秋山、当時の局清作品を写す。傍線は秋山の訂正部分で下部に訂正を示した。

群衆

黙つて立つてゐれば

君も俺も唯一人の寂しい姿。

その後に街がひろがり

空は晴れて

七月の太陽はかつかつと地面に照りかへる

(削除)

君は午後の太陽の灼熱の前に
つかれた弱い君一人を見出さないか

かつかつと地面が燃えて

君は悄然と午後の白い街を

失業者として帰る――

今 君の心にかすかに呪ひが目覚めつつある

ひそかに ひそかに叛逆心がもだへつつある

力の弱い 心の正しい幾萬人が

さうして我等の同志となる

さうして君は群衆の一人となるのだ

(削除)

(削除)

俺達は弱者

一人であつてはならない

ビタリと一つの心にならう

(弱者を弱い に)

(ならないをいけない に)

(削除)

手と手を握り合はう 君と俺達

(削除)

群衆――

群衆の心は常に団結する

団結して叛逆だ

強い 力強い集団

群衆――

我等自らその一員であり

自らそのリーダーである

君、俺、彼等

一人一人はいつも弱々しく虐げられてゐるが

我等の耳にはいつか、何時か、

何時か爆発するであらう群衆の叫びがきこえてゐる。

(削除)

七月の青葉は憂鬱を蓋つて公園を蓋ふ
白い腹をひるがへしてツバメが梢を飛ぶ

熱っぽいほこりが流れる

死人のやうに悄然と君はかへつてゆく

(削除)

君の心に今叛逆がひそやかに動きつつある

街と山野と平原にちらばつて

いつか団結しようとする

意志と熱情を抱いて――
その群衆の
今 君はその一人となるのだ

黙つて見てゐれば

唯一人の弱々しい君

君の背後に七月の街が燃える

果てしなく限りなく遠くつづく家並

かつかつと音を立てて太陽の熱情が豊に照りかへる。

原本が秋山のものだったから訂正部分もコピー出来た
わけで、繁雑ながら推敲の跡も見つた方がよからうと思つ
て右の形にした。

次は一九二八年八月発行の『單騎』二号の、やはり当
時は局清だった秋山作品である。

この『單騎』は矢橋丈吉(公磨)の編集発行で、二号
までは菊判の雑誌、三号は大判のリーフレット型になつ
てそれを最後に宮嶋資夫、五十里、幸太郎、岡本潤など
の『矛盾』に合併した同人誌で、秋山が創刊から仲間だつ
たことは『自選詩集』の略年譜にあらわれている。ただ
秋山自筆の略年譜に「飯田豊二、河合仁らと『單騎』創
刊」とあるのは、編集発行を主導した矢橋丈吉の名を先
頭に置かなくては正確ではない。そして秋山は『秋山清
詩集』に『單騎』の一号、二号の作品を収めながら、これ

から写す二号の作品を収めなかった。洩らしたのか外し
たのか、いまとなつては質問のすべがない。『單騎』全
三冊のコピーも原本は秋山から借用した。これには訂正
はない。

孤独の日に於ても

1

私と別れる爲に

女は子供を負つて里へ相談に行つた

障子の破れから外を見ると

自動車が埃を上げてゐる

昨日も、一年前も

あの子が生れたときも同じ暮し――

愛を知らないとも言はれた

の、しられう!

誰からも軽蔑されよう!

四時になる――

自分は里との話がどうきまつたかも聞かずに夜の仕事を

出てゆく

2

疲れ切つてゐる

手足がなえてゐる

鼻血が黒く枕許の新聞紙に乾いてゐる

頭の半分が痛い

——心から笑へるやうになるだらうか

3

心から嬉しく笑った事がない

心から笑ひたいと思つてゐない

昨日よりも明日はもつと笑へまい

くさつてゆく

くさつてゆく

自ら、求めて汚れてやれ

ほんとにから／＼と笑へる奴に逢ひたい

俺はそ奴に感服するだらう

4

死のうと思つた事はない

かうして生きてゐるんだ

たしかに希望を持つてゐるんだ

恐らく君よりも失望しまい

——それなのに

時々涙が出る

5

夕方から心が燃えるのを感じた

耳たぶが赤く焼けてゐた

今日のヒル間逢ひに来たキヤツ

「僕等は少しでもいゝから

自分の力が知りたいよ」と……

そして奴は今或る党のために働いてゐる

「自分の感情は犠牲にする」といつた

自分！を忘れ得る男を賞讃しよう

彼は友情も昨日までの決意も捨てた

彼は自らの信ずる道へ行つたのだといった

青黒く汚れてゐる自分に比べて

彼は生々と輝いて見えた

「僕は君と同じ事は出来ない」と私

「では、大切にし給へ」

彼の言葉には軽蔑がなかつたらうか

冷酷に、冷酷に、冷酷に——自分に云ふ

——自分を忘れ得る男を賞讃しよう

手を組んで坐つてゐると

モーターが重く、をもう、をもう呻いてゐる。

6

逃げきれない絶望

そして自己嫌悪が強くなる

仲間が一人減り、二人減り

青葉がみづみづしくなつてゆく日

一人孤独がオレをさいなむ

自己をまで軽蔑し、踏みにじらうとするのに

明日が、明るく輝いてゐる事を

俺達の上に苦悶とその為の歓喜があることを忘れ切らな

いこの孤独の日に於て

かつて俺が彼にはげましたと同じ声が

俺をあざける

俺をあざける

俺を信じ立たせようとする。

もとの雑誌『單騎』では一行が十七字詰(三段)でページ余り、秋山の生涯すべての作品のうちでも長い部類に入るものだろう。その他、いわゆる鑑賞的な思いはあるが略してもう一篇、太平洋戦争が終つて間もない時期の作品に移る。

ガリバン雑誌『武良徒久、黒色或は散策』は一九四五年十一月三十日に創刊号を出し、翌年一月二号、四月三号、八月四号のあと、一九四七年九月五号を終刊号と名乗つて出した。

『コスモス』の第一次二号、一九四六年六月発行のものに「受贈誌」という埋め草記事があるが、そこに並べられた二十六の誌名に『武良徒久』も入っている。これは私の兄の編集発行(二号のみ私)したもので、同人は兄と私の交友関係から募つたが、実は先輩の寄稿を主な狙いとして、石川三四郎、木村艸太、伊藤和その他多くの人々の協力を得、特に西山勇太郎は毎号の文章で辻潤関

連の貴重な記録を残している。しかしいまは寄り道せず終刊第五号の秋山作品を見ることにしよう。

従弟

七年ぶり

台湾からかへつた下手クソの手紙。

もう三十に近いだらう。

物価の高いはなし、

米やイモのこと

母が年よつたこと

引揚者に仕事がないこと。

八月は毎日はれて

東風が吹きつづける

海岸の松原がいちんち鳴つてゐる

内海は赤くにこれて

魚は獲れず

暑さに仕事もせず

風通しのいい窓下に

莫塵しいて皆ごろごろしてゐる。

——そんなの二十年前のことだ。

このごろは夏も漁をつづける

少しばかり何か獲れ

女どもが争つて買ひ

闇で街へもつてゆく。

青年は股旅ものの素人芝居に夢中。
女の子はバーマネット。

人情紙の如しだと。
生意気をいふな。

お前は母にどんな思ひをさせた。

戦争が終らねば

お前はまだかへらぬ。

植民地で

おもしろおかしく

お前はくらし

母はまだ野らで働きなげいたらう。

お前の姉はいまも独身。

放つたらかしこの故郷へ送還されると

もう人々の人情が薄いなどと

そのお前を

をばさんはどんなに喜んで迎へたらう。

それが見えるやうだ。

一九四六・八

この作品は伊藤和の「岡本潤論」という文章に天地左右をかこまれた中央の枠内に刻まれている。表題と署名は原稿に蠟原紙をのせた秋山自筆の透き写しである。

『秋山清詩集』の最初の版が刊行された時、いくつかは見られた誤植、それに私としての疑問について秋山と手紙を往復させたことがあり、増補版では誤植は訂された

が、同時に指摘した「従弟」の存在は、仕方がないというようなことで生かされなかった。増補は「朝にかけての団欒」だったからこれはまさに仕方がなかった。

ついでなので増補版をふくめた『秋山清詩集』の末尾にある「索引―初出覚え書」について付記する。

まず「あくびの子供」という作品、これが「索引」では初出誌名を欠いている。初出は太平洋戦争後に土屋公平の編集発行に鈴木勝や伊藤和が大きく協力した雑誌『詩精神』の六号、手もとの雑誌の保存不良で発行時を確定出来ないが一九四八年の何月かである。

もう一篇、「おやしらず」という作品は「索引」によれば「1944 詩運動」なのだが、これも正しいところは「詩精神」だろうと私は解している。

この作品について秋山は次のように書いている。
——昭和十九年の秋深まる頃から仕事のことから富山県から新潟、秋田、青森、北海道に旅行した。行きかえりに幾篇かの風景の詩をかいた。私はもう全く発表する思いはなく、やり切れぬうつくつをひそかに放散するためのみあることを自覚していた。爾来四十年余。

引用は暮尾淳著の『おやしらずの詩』（緑の笛豆本）に付されたものだが、そういう発表の思いのない（場もない）作品の書き溜めの一つが「おやしらず」であったことは『詩精神』創刊号の、おそらくは初出であるもの

挽歌

木原 実

夕焼けが武蔵野をつつんで どこへ急ぐか 下駄ばきの

秋山清

晴れたそらのした 山羊が一回 上高田あたりの草っ原
に消えていった

〈死ねば死にきり〉 裸木の幹たたきながら 風に打た
れていった人よ

アナキスト詩人死すと新聞にでていた日の大福餅はあな
たのもの

あの人より長くといっていた秋山清あえなく死んで冬晴
れの日がつづく

高村さんに銭をもらった話などしてロダンをみていた
柵にもたれて

の表題が「親不知」で末尾に「（昭和十九年十一月）」とされている点から推定出来るのだ。この『詩精神』創刊号は、三号が一九四七年五月発行を基に考えれば同年初めか前年末となるか。千葉市に健在な鈴木勝さんに照会すればわかるだろう。私は「索引」に明記された『詩運動』という雑誌が後年に存在したのを知らないではないが、それと秋山の「おやしらず」を結ぶ考えは浮かばない。仮に結び得るとしても初出は『詩精神』ということになる。切りぬき保存に当って秋山は誌名を誤記したのではないかと、もっとも軽くしかし十分に現実的なところをいま思っている。

— 89・5・26

あるときは大正ロマンのほのかな悲しみを語りつきな
かった思想家・秋山清

「自分」という小さな叛逆者大事に 世間の話などして
アナキスト

市ヶ谷台に飛行船のやってきた日 監獄跡をみにゆ
こうと別れた

詩も文章も書けなくなって、わずかに自由律の短歌を
ひねくって日を過している状態で、せめて秋山の挽歌を
となつたので、これは許してほしい。

それにしても秋山清の挽歌を書くとは、どこことなくち
ぐはぐでしっくりこない。それどころか秋山が死んで半
年たっても、秋山の死んだという実感が無い。つまり私
にとつての秋山というものが、いつまでも整理されてこ
ないのだ。困つたものである。

挽歌を書きながら思つたことだが、秋山は意外にとい
うか、オーソドックスな短歌観の持主で、かれにいちど
たしかめたいと思つたこともそのままになつてしまつた。

秋山には三一新書に「短歌入門」の一冊があつて、な
かなか良い本だし、亡くなる前には旧作の歌を集めて歌

はしていない。すくなくとも小野の批評にこたえる抒情
と韻律の問題が終つたようにはおもえない。それだけに
短歌は重荷をにない、また私のようにコンプレックスを
抱きつづけているのである。

盟友小野の投げた問題にかかわることなしに、秋山が
短歌を論ずることはあるまいと私は考えていたのだが、
前記の「短歌入門」でも素通りする形で短歌を論じてい
る。私は意外に思つた。

秋山の詩は抒情をけざりつたりリアリズムといった詩
が多い。抒情の排除はかれのリアリズムの方法といて
よいかも知れない。かれの詩のなかに短歌的抒情の意味
をさがしたり、短歌の存在さえ想定することは不可能だ
ろう。短歌ともっとも遠いところで、かれは抒情をけざ
り、かわいたリアリズムで自分の世界を追求した。

しかし待てよ、と私は考えた。秋山は詩において抒情
をけざつたが、詩のほかのジャンルでは大きな抒情の充
足がはかられている。啄木を論じ夢二を語り詩人乃木希
典をいとおしむ。かれの大量の仕事のかんりの部分が、
考えてみると、したたかな抒情詩人の仕事としか考えら
れないものがある。根に短歌ずきの面があつて、それも
とりこんで、試みた秋山の仕事の数々。

そういえばかれの詩も、抒情をけざつたが、そのため
に詩は生き生きとして、ほかならぬ抒情詩となつてい
る。秋山清はどう考えても抒情詩人である。

短歌的抒情について語らなかつたのは残念だが、それ

集「冬芽」をだしている。しかしかれはほとんど短歌に
ついてはなしたことがない。歌集をだすときも照れ笑
いしながら「知りあいの編集者が」本にするといつて
「持つていった」式の弁明を私になんどもして、おかし
かつた。かれは歌集をだすことがよほど嬉しかつたのだ
らう。

またそんな様子を見てみると、根っ子の方に短歌好き
の一面があつて、それが詩人としてのかれの一種のコン
プレックスになつていのではないかと、と憶測したりし
た。それは長いあいだ詩を書いてきて、年若い短歌の
表現に走つた私の詩にたいするコンプレックスに似てい
る、と思つたりしたものだ。

秋山にせひきいておきたかつたことは、たとえば小野
十三郎が主張したような「短歌的抒情の否定」といつた
問題である。

「短歌的抒情」の問題といい、あるいは「奴れいの韻律」
という問題の提起は、ある意味では近代短歌の根幹にふ
れる問題である。小野はそれを日本の文化の問題として
も、あるいは短歌の戦争犯罪としても論じた。それは
「第二玉術論」をさらにふみこむ議論として、戦後を歩
みはじめた歌人たちにさけられない形で、影響をあたえ
た。

戦前からの長い空白の後に短歌の世界にもどつた私が
つきあたつたのも「短歌的抒情の否定」の問題である。
ありていに言つて、短歌の実作者としてまだ十分に解決

も詩において抒情を追いつめ追いつめてゆく過程のなか
で、消化していたのであらうと考えたい。

近ごろ短歌の世界で定型歌人たちが、極端なまでに五
七五七七の型式をいじめぬき、そこから抒情の転換をも
とめ多様化をもとめる試みがある。口語的発想も普通の
ことになつてい

る。そんなことを想うと「現実をして語らしめる」とい
うところから出発し、リアリズムとは「現実の否定である」
とするまで、いつてみれば抒情をけざりにけざつて到達
した秋山の詩のなかには、実にたくさんさんの鏝骨のあとが
あつて、たくさんさんのことを語つていようような気がする。

秋山が市ヶ谷の私の事務所を訪ねてきたのは、寝込む
少し前のことだつた。嬉しそうに四方山のはなしをした。
バックから出たばかりだといつて「昼夜なく」を出して
くれた。ふと思ひだして「市ヶ谷監獄の跡へ行ってみた
い」と私がいうと「ああいいよ、ここからすぐだ。森長
弁護士の建てた碑もあるし、すぐ分るよ」といつた。

これが秋山清の、私にたいする最後の言葉になつた。

秋山に

小野十三郎

秋山よ

きみはおれより

一つ齡下なのに

おれをおいて

先に逝ってしまったな

まだ早すぎやしないか

くたばってしまえとおもうやつは

たくさんいるのに。

いまおれは

新井翠翹さんの写真集を見ている

はじめの方の右頁に

きみの姿がある

引越し準備をしているのか

本を重ねて紐で結んでいるきみは

少し疲れていた様子だ

おれも毎日臥たきりだが

おれが三十歳で東京を引揚げるとき

きみは同じような格好で

おれの本を荷造りしてくれた

まるで新井さんのカメラは

そのときのきみの姿をとらえているようである。

きみはきみの流儀で

ユートピヤを望みながら

若い時から

一生引越しをつづけてきた。

いつもたくさんな書物を

紐で結んで。

※この詩は日本出版クラブで行なわれた「追悼の会」（一九八九年一月二十一日）で朗読されたものである。